

時 諸 相

経済学の時間

経済学部准教授 大村真樹子



経済学では伝統的に時間を考えない分析の仕方がある。そのほうが、経済の仕組みが分かりやすいからである。一〇〇℃になれば水が沸騰する、という現象を理解するのに、時間的な経過がさほど重要ではないことと似ているかもしれない。もちろん時間を取り入れた分析もあり、近年では特に重要性を増している。

現在志向と過去と未来

経済学は現在志向だ。もちろん、経済学は過去に学ぶ。現在は過去に依存するし、私達は過去の教訓を学ばなければならぬ。でも私達は、今の高い失業率に気を病むことはあっても、過去の高い失業率に気を病むことはない。過去からの現在があり、ここから出発しなくてはならないからだ。

では未来はどうか。経済学では、未来の

目標がどのように私達の現在の行動を決定づけるのか、という分析とともに、現在の意思決定や行動が未来にどのような影響を与えるのか、という分析がされる。今議論されている消費税や社会保障も、将来世代にかかわる問題である。ただ、未来と現在は、経済学では同等には扱われない。

あなたが今、一億円の宝くじの大当たり券をもらえると仮定しよう。この大当たり券は二種類あって、一つは今すぐ一億円がもらえる券、もう一つは一年後に一億円がもらえる券である。どちらか一方の券を選べるのなら、あなたはどちらを選ぶか？

おそらく私達の多くは、今すぐに一億円がもらえる券を選ぶであろう。なぜか？ 私達には未来よりも現在により価値を置く習性がある。経済学的に言うくと、私達は

「将来を割引く」のである。割引は様々な政策に影響を与える。

例えば、今対策を行わないと将来の甚大な被害が予想される温暖化問題。現在一億円の対策をすることで、一〇〇年後の一〇〇億円規模の被害が免れるとする。さて、この対策はとられるべきか否か？

さほど大きいと思わない毎年五%の割引でも、一〇〇年後の一〇〇億円は現在の七六〇〇万円程度になってしまふ[※]。つまり、費用の方が便益(免れる被害)より高くなるのだ。当然、この対策はとらない方が良いことになる。こうした分析は、私達の習性の結果を客観的に見せつけてくれる。

『時は金なり』

ちなみに、行動には常に「機会費用」があると経済学では考える。皆さんが大学にいる機会費用は、その時間、働いていたのであれば得られたであろう給料分といえよう。学費等と合わせたら、かなりの額となりそうである。時間は他に代替物のない、まさに希少な資源である。是非意識して、大学にいる時間の便益を最大限実現しようではないか。

※100年後の便益の現在価値 = (100億円) / (1 + 0.05の割引率)^{100年}